

医療 最前線

県立中央病院から
〈171〉

心臓から送り出された血液を通す大動脈の一部が膨らんでできる大動脈瘤。動脈硬化が主な原因で、ほぼ無症状で経過するが、破裂すると致命的になる場合が多く早めの治療が望ましい。県立中央病院は、この大動脈瘤に対する

津田医師によると、大動脈瘤の原因の90%は動脈硬化で、高血圧や高脂血症、また喫煙などの生活習慣によって発症リスクが高まるという。

腹部にできたものは直径4〜4.5センチ、胸部は直径5センチ以上になると破裂の危険性から

治療が検討される。

従来の人工血管置換手術は、腹や胸を20センチほど切開するため患者への負担が大きいく、術後の回復に時間がかかった。一方、近年普及しているステントグラフト治療は、脚

きる医師の人員が充実。院内の医師のみで定期的に実施できる体制が整った。これまで

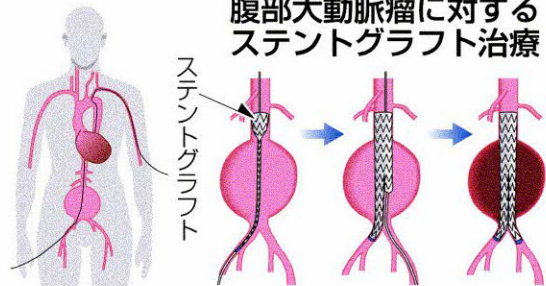
は治療を希望する患者は数カ月待ちだったが、1カ月程度で実施できるようになったという。

大動脈瘤 医師の体制充実

負担少ない治療も選択肢

ステントグラフト治療を昨年10月から本格的に始めた。心臓血管外科部長の津田泰利医師は、「患者さんの体への負担が少ない治療法で、高齢患者さんにも比較的安心して受け

腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療



ルを通し、金属のバネに裏打ちされた人工血管(ステントグラフト)を患部に入れ、大動脈瘤の破裂を予防する。脚の付け根に長さ3センチほどの傷がつく程度で血管の中から治療するため、術後の痛みが少なく入院日数も少なくて済み、「高齢の患者さんにも治療の選択肢が広がった」という。

同病院では、以前から外部の医師を招いて不定期でステントグラフト治療を行っていたが、昨秋、同治療を実施できるようになった。その結果、ステントグラフト治療実施件数は、2017年の24件(腹部11、胸部13)から、18年は57件(腹部38、胸部19)と2倍以上に増加した。90歳代の患者に実施したケースもあった。